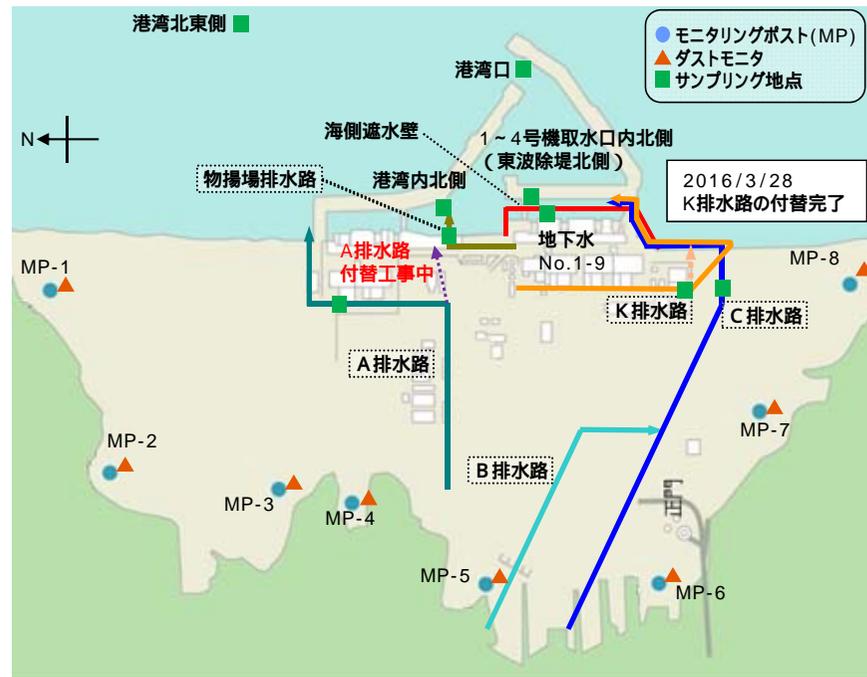
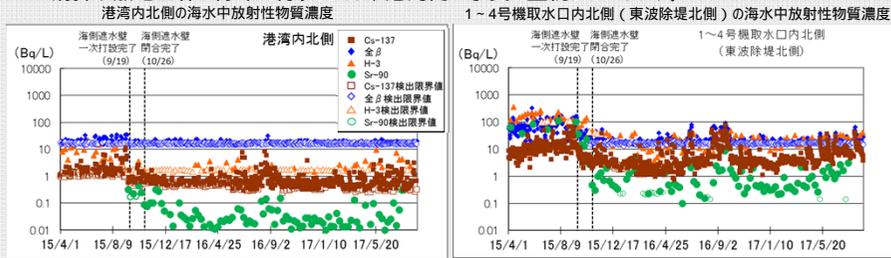


- 前回(7月27日)以降のデータ公開数は約8,800件
前回以降、「周辺の放射性物質の分析結果」「日々の放射性物質の分析結果」のデータ約8,800件を公開しました。
- 1号機建屋カバー壁パネル取外し完了 敷地内ダスト(粉じん)濃度は安定
1号機では、原子炉建屋カバー解体工事において、屋根パネル取外し(2015年10月5日)以降、ダスト飛散防止対策として散水設備の設置、崩落屋根上の小ガレキ吸引、飛散防止剤散布などを経て、2016年9月13日から壁パネルの取外しを開始。11月10日に全18枚の取外しが完了し、オペアロ調査を実施しています。2017年8月4日にモニタリングポスト 4(MP-4)付近、8月23日にモニタリングポスト 2(MP-2)付近に設置したダストモニタにおいて発生した高警報については、当該ダストモニタ付近における大気中の天然核種による影響と推定しています。また、念のため当該ダストモニタの交換を実施しています。これ以外これまで、敷地境界を含め、敷地内ダストモニタのダスト濃度に有意な変動は確認されていません。今後も、飛散抑制対策の実施とともにダスト濃度の監視をしっかりと継続していきます。
- 港湾内海水の放射性物質濃度は低い濃度で安定
8月も降雨が多く、1～4号機取水口開内及び港湾内海水の放射性物質濃度に上昇が見られましたが、降雨後は海側遮水壁閉合に伴い低下した濃度に戻っております。引き続き、排水路の清掃や敷地全体の除染を行うとともに、港湾内の水質を監視していきます。

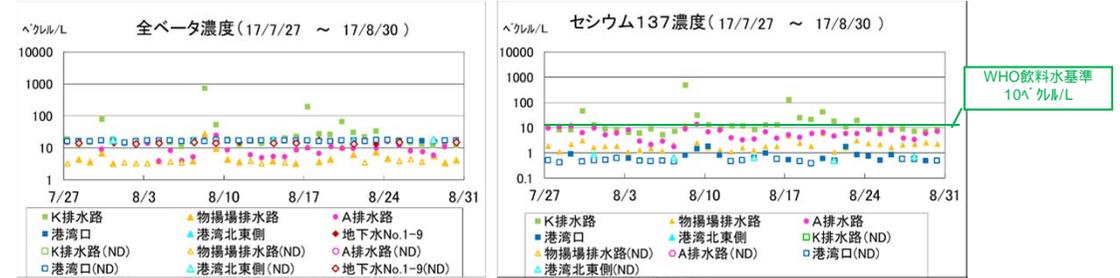


データ採取位置図(右のA、B、C等に対応するポイント)



A 水(海水、排水路、地下水等)

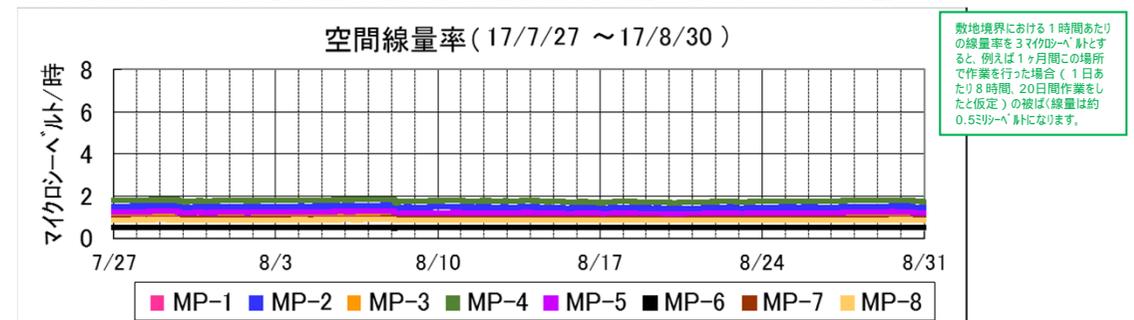
- K排水路では、降雨時にセシウム137、全ベータ濃度が上昇。
- セシウム137は、降雨時のK排水路を除き概ねWHO(世界保健機関)飲料水基準を下回った。
(地下水 1-9については全ベータ濃度で監視)



全ベータとは、ベータ線を放出する全ての放射性物質。カリウム、セシウム、ストロンチウム等が含まれる。
海水の全ベータについては、天然の放射性カリウムが約12ベクレル/L含まれている。
(ND)は、不検出との意味で、グラフには検出下限値を記載。

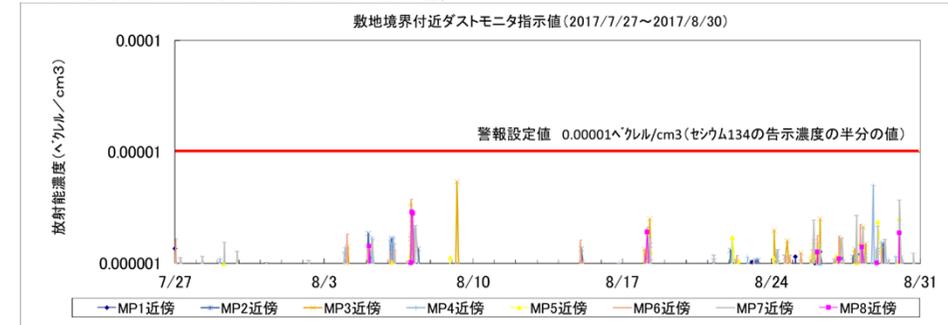
B 空間線量率(測定場所の放射線の強さ)

- 降雨による一時的な線量率低下が何度か見られたが、低いレベルで安定。



C 空気中の放射性物質

- 大きな上昇はなく、低濃度で安定。

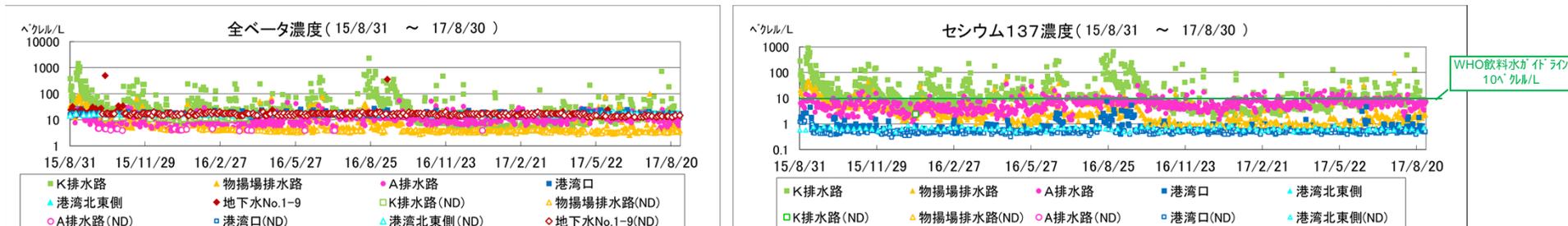


8月4日 11時47分 MP4近傍連続ダストモニタ及び8月23日 12時10分 MP2近傍連続ダストモニタにて「高警報」が発生。調査の結果、いずれも天然核種による一時的な上昇と推定
告示濃度とは、法令に基づき国が排出を認める濃度。国内の原子力施設共通の基準。

放射線データの概要 過去の状況

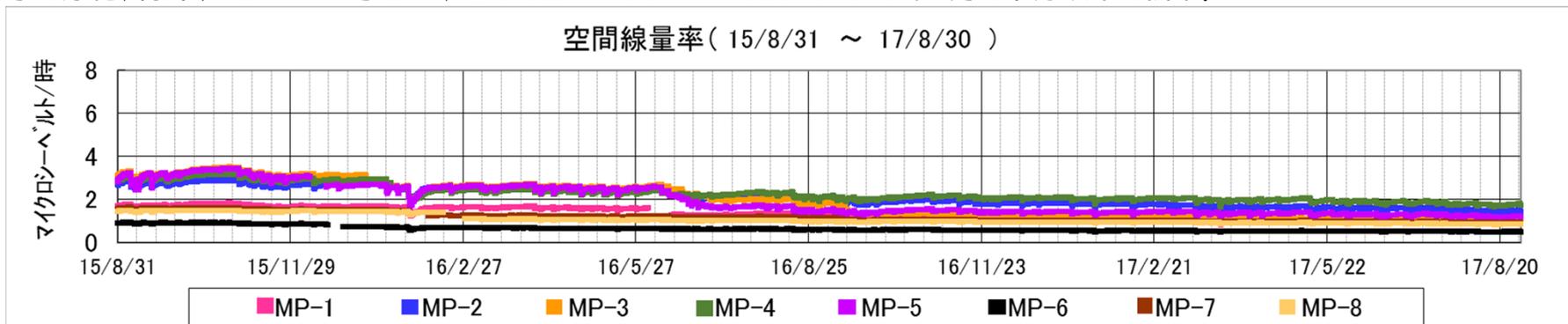
A 水（海水、排水路、地下水等）

- ・港湾口は低水準で安定。セシウム137はWHO飲料水基準未滿。
- ・K排水路の降雨時の濃度上昇は減少傾向。引き続き清掃等の対策を実施中。2016年3月28日に排水先の港湾内付替えを完了。



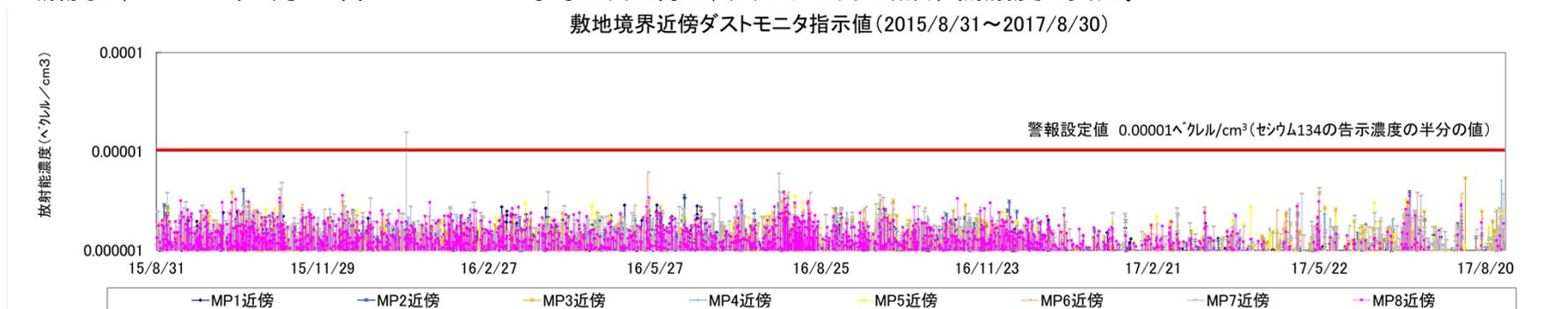
B 空間線量率

- ・汚染水の浄化、除染、フェーシング等により、全てのモニタリングポストにおいて2013年4月の半分以下に低下。



C 空気中の放射性物質

- ・ダストの濃度は、2016年1月13日のMP-7の一時的上昇を除き、大きな上昇は無く、低濃度で安定。



・MP3,5,6近傍は2015年5月14日より、測定開始。

サブドレン・地下水ドレンによる地下水のくみ上げと分析

分析結果・排水の実績

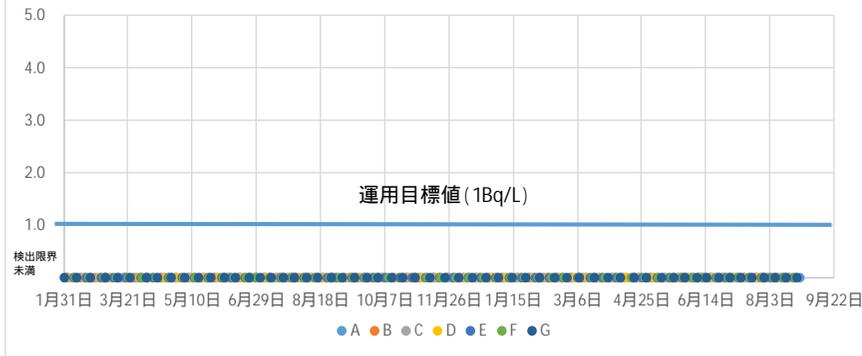
一時貯水タンクに貯留しているサブドレン・地下水ドレンの分析結果で、セシウム134、セシウム137、全ベータ（ストロンチウム等）、トリチウムが運用目標値を下回っていること、その他ガンマ核種が検出されていないことを確認しました。

同じサンプルを第三者機関にて分析を行い、運用目標値を下回っていることを確認して、2015年9月14日から2017年8月30日までに合計479回、396,286m³を排水しました。

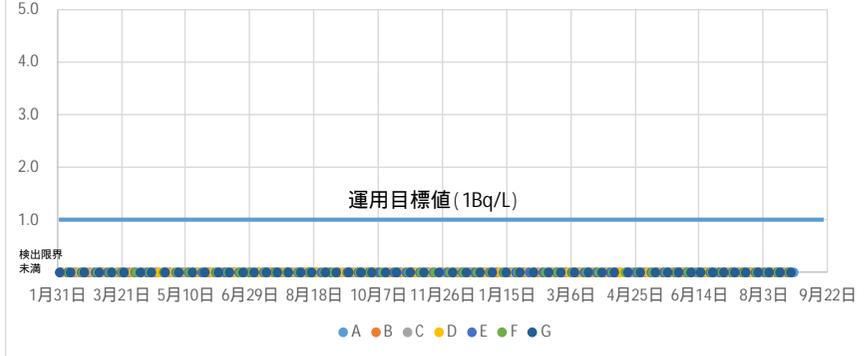
今後も、分析結果が運用目標値を下回っていることを確認した上で排水する運用を徹底してまいります。

一時貯水タンクの分析結果（当社分析値）

セシウム134濃度 (Bq/L)



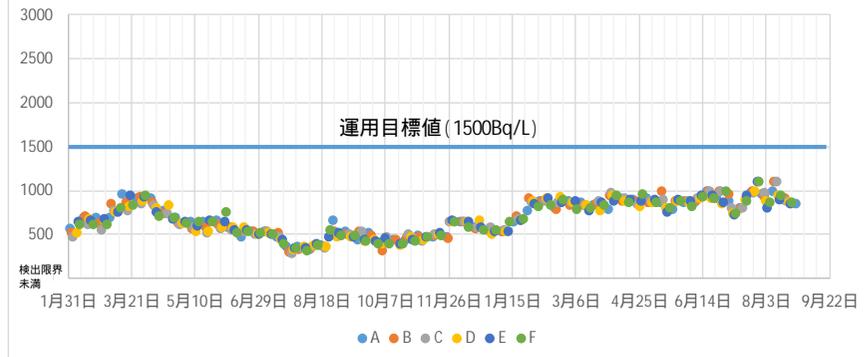
セシウム137濃度 (Bq/L)



全ベータ濃度 (Bq/L)



トリチウム濃度 (Bq/L)



サブドレン・地下水ドレンの分析結果の詳細については、<http://www.tepco.co.jp/decommision/planaction/monitoring/index-j.html#anc01sd> をご覧ください。

3号機原子炉格納容器内部調査における被ばく低減対策について

燃料デブリが存在する可能性のあるペDESTAL地下階の状況を確認すること、また、ペDESTAL内次回調査装置への設計・開発フィードバック情報(X-6やCRDレールの状況等)を取得することを目的に、3号機原子炉格納容器内部に調査装置を投入し、2017年7月19日、21日、22日に調査(水中調査)を実施した。

今回の調査で、事故後初めてペDESTAL内部の状況を撮影することができた。ペDESTAL内部において、CRDハウジング支持金具の複数箇所での損傷が確認され、CRDハウジング支持金具に溶融物が固化したと思われるものが付着していることを確認した。また、ペDESTAL下部においても溶融物が固化したと思われるものやグレーチング等の複数の落下物、堆積物を確認した。これは廃炉作業における大きな一歩であり、得られた画像データを元に、ペDESTAL内部等の状況を継続して確認する。

3号機原子炉格納容器内部調査において、作業員の被ばく低減の観点から実施した代表的な対策は以下のとおり。

【線源】 除染作業の実施および遮へい体を設置

2013年8月～2016年11月かけて3号機原子炉建屋内の除染(ガレキ撤去、床面・壁面の除染)を実施。

また、作業場所に遮へい体を設置することで更なる線量低減を図り、ガイドパイプ設置作業時等の作業員の被ばくを低減。

【距離】 調査装置の操作を遠隔で実施

直接作業が困難な高線量エリア(数10～数100mSv/h)での操作を免震重要棟から遠隔で実施することで、作業員の被ばくを低減。

【時間】 ガイドパイプ挿入作業や調査装置遠隔操作等のモックアップを実施

モックアップで、既設温度計引き抜きやガイドパイプ挿入等の作業手順を確認することで、現場での作業時間を短縮し、作業員の被ばくを低減。

また、調査装置の操作についても、2017年3月～6月にかけて事前にモックアップを実施し、遠隔操作技術の習熟を図った。

(調査装置の遠隔操作を習熟することで、作業時間内に広範囲にわたって効率よく調査を実施できた。)

- 以上の対策等を実施し、作業員の被ばくを大幅に低減。除染作業および遮へい体設置においては、対策後の作業場所の雰囲気線量は約12mSv/hとなり、対策前の約140mSv/hに対して、雰囲気線量を約91%低減することができた。これに加え、鉛マットの設置等、作業時の作業員の被ばく低減対策を実施。また、温度計取り外しやガイドパイプ挿入作業等の一連の作業における当初各班の計画時間は約10分以内を見込んでいたが、繰り返し作業手順を確認しながらモックアップを実施したことで、現場作業は計画を大きく下回る各班約5分以内で実施できた。これにより、温度計取り外しやガイドパイプ挿入作業等の一連の作業における作業員の被ばく線量は、約1/20に低減できたと考える。

調査概要図

